和歌の句切れに関する一考察

－新しい認定基準私案の構想－

和歌における句切れの定義として「第五句（結句、末句）以外の句の終わりに意味上の切れ目があることをいう。句切れの意味と定義を」「第五句（結句、末句）以外の句の終わりに意味上の切れ目があることをいう。句切れの意味と定義を」とし、「和歌大辞典昭和六年三月・明治書院・二十五頁」とする通説の考え方を基本的には異論するという立場が、個別的な態度として望ましい。実際の定義となると、定義と認定基準との間に微妙な違いを生ずる場合が少なくないうる。～

浅岡 純朗

－113－
さとはわれて人はふりにしやどなれや庭もちがきも秋のなるる（古今巻四・秋歌上・二四八・僧正遍昭）

なびかじな海人のもしは火たきぞめてふりはそらにゆりわぶとも（新古今巻一二・恋歌二・一〇八二・藤原定家朝）

などがある。一首目「いとよきかけて」の「て」は「系をより合わせ、（その系で）一つの動作や状態が終わり、引き続いて次の動作や状態に移るもの、その内容を示す接続助詞、二首目「柳桜をこきまぜて」の「て」は連結修飾の関係を示す、下に来る用言の態様、手段、方法などの内容を限定する働きをもつ接続助詞、「四首目「もしひ火たきぞめて」の「て」は事柄や動作、状態などが同時に並立して存在するものを示す接続助詞で、これらの接続助詞であるが、これらの接続助詞「て」によって、それらの前後の句が独立して存在するのではなく、それらの間で接続助詞「て」がつなっている。つまり、「前・後の句ともに文を文法的に句が切れているのが認識できるので、文法的には句が切れているとして句切れを認識しているものがある。例えば、次の歌。
二、特定基準私案の基本的考え方

和歌の句切れの新しい特定基準私案を構想すると、先立って、稿者の文論上及び語論上の国語学的立場を明らかにしておきたい。

（一）論文上の整理——大久保文法の援用

まず、和歌の句切れの定義である「意味上の切れ目」は、文の切れ目と同義に考えることができる。それは、文論レベルでいう文の成立そのものであって、具体的には、「主述の完結句」がある場合に、その後に「意味上の切れ目」を原則的に認める。
めようとするものである。

大久保（志利）氏は、稿者の文法学上の恩師であり、かつ、チョムスキー（Noam Chomsky）の生成文法のわが国におけ
る最初の紹介者の一人であるが、この「主述」の完成の確認」という作業において、大久保氏の言う「核文」の成立・独立の確
認という方法を用いることとした。大久保氏は、その著書「増補版日本文法陳述論」（昭和五十一年八月・近治書院）
の、「日本語構文論の構想」の中で、「文のカナメには判断がある」として、「判断」とはまさに、言語的には「主述」を
成し得ていくこと。三者は、「これらの文は、それぞれが主述から成ってい」と、核文とはこういったものであり、それ<br>が加工・変形され
て複雑な思考を表現する。核文の構成については、「主述」、「体言（助詞）」、「述語」、「述語用言（終止形）」
をもとにして不可欠の成分と見た。
「単文」、「単位文」つてできている文
2. 重文、「単位文」つ以上が論理的関係で連続している文
3. 複文、「単位文」が他の単位文の構成要素（節）になっている文

二重文、単位文の分類でいえば、
「単文ー単位文」つてできている文

文の構成上の分類でいえば、
2. 重文ー単位文つ以上が論理的関係で連続している文
3. 複文ー単位文が他の単位文の構成要素ー節ーになっている文

というような複雑な現実の文が形成されるというのである。

もしくは、当該和歌一首を「複雑な現実の文」とみなして、まず「単位文」と分解し、次にその単位文から付加的諸成分・諸変形をとり去ってもとの核文としてとらえる。承り、その成立と独立を確認する。ことである。核文の成立と独立が確認されれば、その後に「意味上の切れ目」があってよいことになるし、逆に「確認ができないければ、意味上の切れ目」はあおつ・従って、句切れも認められない、ということになる。

記述にによる数文の独立・独立が確認されること、その核文（または、その核文を含む単位文）に次に、句切れの位置である「意味上の切れ目」があると推定されることになる。そのうえで、語句レベルにおける文の終止が、句切れの位置を決定するために重要な役割を担う。
月・明治書院・七三九頁」であり、①「続く文節」は、一つの文において、切れる文節以外のすべての文節、②「切れる文節」は、文の最後にあって、そこで文が終結する文節（一つの文では、普通「ただけである」とされているが、この概念を和歌でいう「句」、「句切れ」に当たる）と、切れる接続文ではないが、特に「続き」を示すような接続文であるため、文の最後にあつて疑問、詠嘆、感動などを表わず終結文である活用語の命令形、係り結び、結びの連体形または日常形、③文の終わりにあつて疑問、詠嘆、感動などを表わず終結文である活用語の命令形、係り結び、結びの連体形または日常形、の三つを含む単位文である。前記一文述べたことの繰り返しになるが、問題は、「意味上の切れ目」は具備しないものの、領域Ⅱにおいては狭く、領域Ⅲにおいてはかなり広く句切れを認めている。文との接続文節が軽度なもの、例えば次の歌の一部である。「あさみどりと言ひかれてしかつひをたまにぬぬる春の柳（前出）」一首目の一節「いとよりかけて」の事実の継ぎ・継続を表す接続助詞「て」、二種類の「て」に限っては、「文法的に見て句が切れている」構造を表すが主述の完結が認められ、かつ後述の句切れを求めることができる。また、「和歌における文法的接続文節」における文の意味の貫通性を示す接続文節は、連続形で文を言い切るややかたのは、あとは何かを期待させ、余情をこめた表現となり、当時の人々に好まれた。そして、ついには連続形で言い切ることがもっぱら『日本仏文法大辞典』
昭和四年六月、明治書院・九十一頁）となったが、この連体形の行動、

①「ぞ」「なむ」「や」「か」などの係助詞が上にある場合、文の結びとして用いられるもの（係り結び）。

② 係助詞がない場合でも連体形で結ぶという二つの場合がある。係り結びの例として、

このケースは、先述したように、句切れの認定基準に取り込まれている。一方、係り結びの形式をとっているのに連体

形で言い切らっている次の首

という厳格な立場が求められる。例えば、次の一首

という。「春はきにがり」の後に句切れを認定するように異論はないが、句「こそとやいはむ」の後で切ることには疑問

出の「ひととせ」を同一語句の反復として省略したものと考えることが法的には可能であるが、このような省略は文が

続けない。なお、もぎ掛そまのきりぎりすぎゆく秋はげにぞかなしき（前出）

—— 120 ——
この部分については、
① 核文の成立と独立という観点から見れば三句切れ。
② 句切れの位置の決定が確認される。多様な複数ある善例も、従って、倒置表現がとられたからといって句切れが複数になるというのでは論理的にも無理がある。

三、結び（認定基準私案の評価）

認定基準私案の評価を巡っては、二つの視点を設定できると思う。一つは従前の認定基準で制限的であった領域IIにおいて、句のあわいの連体止め、連用中止形を「文法的に適当でない」と考えられる。